

# 小学生以前の英語学習の持つ 高校時における情意的効果の探索的研究

長沼君主・森下みゆき  
(東京外国語大学・(株)ベネッセコーポレーション)

本研究は「東アジア高校英語教育 GTEC 調査 2006」の日本調査データに基づいたものであり、小中高での情意的変化と動機づけについて、高校生を対象とした振り返り調査により調べたものである。調査対象となったのは、高校1年生 2,005名、高校2年生 1,495名の合計 3,700名である。

分析にあたっては、GTEC for STUDENTS のグレードに基づき、能力層別に高群(G5-6)、中高群(G4)、中低群(G3)、低群(G1-2)にわけ、小中高のそれぞれの段階で英語が好きであったか、または途中から変化したかどうかを尋ねた。全体的な傾向としては、小学生段階では、好きだったと回答した学習者が 49.2%いたのに対して、中学生段階では 48.5%、高校生段階では 32.4%と、高校生段階で大きく減少していることがわかった。小学生以前に英語学習を経験していない学習者では、中学生段階で 29.0%、高校生段階で 24.3%といずれにおいても 3 割弱の回答であり、小学生以前の英語学習が一定の情意的効果を持つことがわかった。

ただし、小学生以前に英語学習を経験した学習者のうち 11.0%は、中学生段階において、最初は好きだったが途中から嫌いになったと回答しており、中学の段階で情意的つまづきを覚える学習者も少なからずいることがわかった。高校生段階で英語を好きと答えた学習者のうち、小学生、中学生段階とずっと英語が好きであった学習者は 65.3%と 3分の2程度であり、必ずしも小学生以前の学習で育成された情意が持続しているわけではないこともわかる。

高校生段階で英語が好きであると答えた学習者では、GTEC for STUDENTS スコアの平均が 462.4 点であったのに対し、嫌いだと答えた学習者では 375.5 点と情意と能力は大きく関連をしており、いかに小学生以前の英語学習で培った肯定的情意を持続させるかが問題となる。高校生段階で嫌いから好きへと変わった学習者のスコアは 423.4 点と、どちらでも

ないと答えた学習者の平均である 420.7 点とあまり変わらない。高校入学以前に英語を好きな状態にしておくことが、重要であることが示唆される。

高校生段階での動機づけの状態を分析してみると、高スコア層では英語を使ってコミュニケーションを取りたいといった友好動機や言語や文化への興味動機が高い値を示しているのに対して、低スコア層になるにしたがって、それらの動機は低くなり、映画や音楽などへの一般文化への興味動機や社会に出て役に立つからといった**功利的な動機**が主な動機となり、仕方がないからやっているといった**義務的動機**が高くなる傾向にある(図 1)。

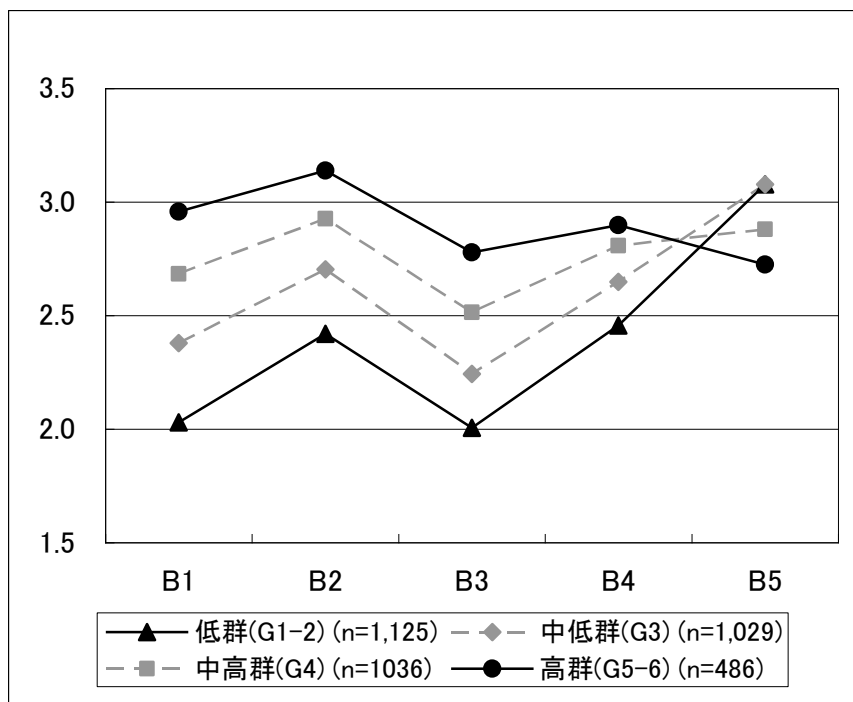


図 1 言語学習動機づけと GTEC for STUDENTS グレード

B1：友好動機、B2：興味動機(一般文化)、B3：興味動機(言語文化)  
 B4：社会的承認動機(功利動機)、B5：状況必然動機(義務動機)

小学生以前の英語学習でも表層的な楽しみだけでなく、より深い言葉を学ぶこと自体の面白さや文化的興味をいかに育成していけるか、またそれがその後の英語学習へどのような効果をもたらすか、今後の研究で探っていきたい。